京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

（3 年計画の 3 年目）

1. 研究課題

オーラル・ヒストリー・アーカイヴスによる戦後日本映画史の再構築

Reconstructing Post WWII Japanese Film History through Oral History Archives

2. 研究代表者氏名

谷川建司

Takeshi Tanikawa

3. 研究期間

2016 年 04 月 - 2019 年 03 月（3 年度目）

4. 研究目的

日本の映画研究は美学・文学といった人文科学系研究者による映像のテクスト分析の手法に偏っており、映画を産業として、あるいは文化制度・文化政策・観客に対する効果といった社会科学的関心から研究対象として扱うアプローチが不足している。映画は芸術である以前に“興行”、即ち娯楽として発達してきたものであり、その作品がいかなる形で作られ、あるいはそれがどのような切り口で観客に提示され、いかに受け取られたのかという側面も同様に重要である。映画の作り手には監督や撮影監督以外にもスクリプター、殺陣師、美術等様々なスタッフがおり、更に配給・宣伝担当、劇場スタッフ等多くの関係者がいる。受容する主体としての映画ファンの存在も重要である。本研究は様々な形・多様な経路で映画文化の創出に携わってきた人たちの経験を参照可能な形にアーカイヴス化する作業を通じて、映画文化発展の特質を社会的・経済的側面に着目して解明することが目的である。

5. 本年度の研究実施状況

三年計画の最終年度である本年度は、まず年度初めの 5 月 12 日（土）・13 日（日）に第一回研究会を開催した。初日は、ゲストとして、大部屋俳優として東映、大映、京都映画に所属されていた平井靖氏を招き、さまざまな時代の現場の様子について話を伺い、また、舟漕ぎの名手として様々な映画やテレビ時代劇で舟を漕ぐシーンを演じてこられた際のこつなどについて映像を交えながら説明をして頂いた。二日目には前年度から開始したメンバーによる研究発表の第三回目として、西村大志（広島大学）が「映画製作と借金――岡本喜八、古澤憲吾、松林宗恵」というテーマで発表を行った。 第二回研究会はそのすぐ翌週の 5 月 19 日（土）に行われ、子役として各映画会社の作品に出演した後に成人後も俳優として活躍されている目黒祐樹氏をゲストに迎え、俳優一家に生まれ育った少年時代から始まって、成人後の主な出演映画作品、テレビ作品の撮影時のエピソードなどを、映像を確認しながらお話頂いた。 第三回研究会は 7 月 21 日（土）・22 日（日）の二日間、場所はゲストの都合により東京の早稲田大学にて開催した。一日目はゲストとして元・大映、元・日活のスクリプターとして活躍してこられた堀北昌子氏を招き、大映京都撮影所と日活調布撮影

所というふたつの全く異なる環境での仕事について話を伺った。二日目は、研究発表の第四回目として、久保豊（早稲田大学）が「ロゴから辿る日本映画のイメージ戦略―日活撮影所を一例に」というテーマで発表を行った。 第四回研究会は 9 月 22 日（土）・23 日（日）に開催され、初日には元・大映で大道具として活躍し、松竹京都撮影所で最長老の美術管理=装置係として活躍し、後進の育成に従事してこられた馬場正男氏を招いて、その長きにわたるキャリアの様々な時期の様々な作品での経験についてお話し頂いた。二日目には研究発表の第五回目として、花田史彦（京都大学）が「戦後雑誌文化のなかの『近代映画』――小杉修造氏インタビューを手がかりとして」というテーマで発表を行なった。 レギュラーの研究会とは別に、10 月 27 日（土）・28 日（日）の二日間、「人文研アカデミー2018・公開シンポジウム企画「映画『祇園祭』と京都」」を開催した。一日目は京都大学時計台国際交流ホールにて「映画『祇園祭』上映会」を行い、班長による主催者挨拶及び上映作品の背景説明が行われた後、映画『祇園祭』（168 分）の復元版 35mm フィルムでの上映を行った。二日目は人文科学研究所会議室において、シンポジウム「京都史の中における『祇園祭』」を開催した。発表者とその発表タイトルを順にあげると、木村智哉（明治学院大学）「中村錦之助の『祇園祭』製作前夜――五社協定と俳優クラブ組合を中心に――」、板倉史明（神戸大学）「『祇園祭』論争に見る脚本家と監督の権限」、太田米男（大阪芸術大学）「映画『祇園祭』の復元と保存」、京樂真帆子（滋賀県立大学）「映画『祇園祭』と歴史学研究」、そして高木博志（人文研）「近現代史のなかの映画『祇園祭』」である。ディスカッサントを木下千花（京都大学）が、班長・谷川建司（早稲田大学）が司会進行役を務めたパネルディスカッションでは、フロアーを含めて活発な議論が繰り広げられた。来場者数は一日目の上映会が 130 名、二日目のシンポジウムが 70 名であった。 第五回研究会は 11 月 15 日（木）に、関西圏在住者のみでミニ研究会の形で開催された。ゲストには日本の映画草創期の横田商会を設立した横田永之助氏のご子息である横田良之助氏をゲストとして招き、自身、大映で働いてこられたご経験や父とその横田商会などについての話を伺った。 第六回研究会は 2019 年 2 月 24 日に一日のみの形で行われた。この第六回研究会は三年間の活動の最後の研究会であり、ゲストは招かずに、2019 年度内に刊行予定の研究会の成果物としての論考集に載せるべき論考の提出希望者の中で、論考の元となる研究発表の機会がこれまでなかった須川まり（追手門大学）、小川順子（中部大学）、石橋佳枝（テンプル大学）にそれぞれの研究テーマについて発表を行ってもらった。また、シンポジウムの報告書の進捗状況についての報告、三年間の研究会全体の報告書の作成プラン、論考集とインタビュー集の書籍としての刊行のプランについて班長より説明を行い、原稿提出の締め切りを含む今後のスケジュールについて確認を行った。

6. 研究成果の概要

三年計画の最終年度となる本年度は、本研究会の取り組みを外部に発信する試みとして、人文研アカデミー2018・公開シンポジウム企画「映画『祇園祭』と京都」を 2018 年 10 月 27 日（土）・28 日（日）の2日間に亘って開催した。1日目は「映画『祇園祭』上映会」、2日目はシンポジウム「京都史の中における『祇園祭』」を行った。その詳細は「7. 本年度の研究実施内容」に記す。本年度に研究会のゲストとして共同インタビューした5名については、既にすべてのテープ起こしが完了しており、過去2年間の分と併せて、報告書に「インタビュー集」を収録し、印刷・配布する予定である。また、この「インタビュー集」は、一般向けの書籍としても 2019 年 10 月に刊行予定である。さらに、研究会における研究発表をベースとした論考集についても、専門書（学術書）としても 2020 年 4 月に刊行予定である。

7. 本年度の研究実施内容

2018-05-12　第1回研究会（1 日目）

平井靖氏へのインタビューと質疑応答

　発表者　平井靖　大部屋俳優

　司会　谷川建司　早稲田大学

2018-05-13　 第 1 回研究会（2 日目）

映画制作と借金－－岡本喜八、古澤憲吾、松林宗惠

　発表者　西村大志　広島大学

2018-05-19　第 2 回研究会

目黒祐樹氏へのインタビューと質疑応答

　発表者　目黒祐樹　映画俳優

　司会　谷川建司　早稲田大学

2018-07-21　第 3 回研究会（1 日目）

堀北昌子氏へのインタビューと質疑応答

　発表者　堀北昌子　スクリプター(元・大映、元・日活)

　司会　谷川建司　早稲田大学

2018-07-22　第 3 回研究会（2 日目）

ロゴから辿る日本映画のイメージ戦略――日活撮影所を一例に

　発表者　久保豊　早稲田大学

2018-09-22　第 4 回研究会（1 日目）

馬場正男氏へのインタビューと質疑応答

　発表者　馬場正男　大道具・装置係（元・大映）

　司会　谷川建司　早稲田大学

2018-09-23　第 4 回研究会（2 日目）

戦後雑誌文化のなかの『近代映画』－－小杉修造氏インタビューを手掛かりとして

　発表者　花田史彦　京都大学大学院教育学研究科

2018-10-27　人文研アカデミー2018「映画『祇園祭』と京都」 第 1 日目

「映画『祇園祭』上映会」 映画『祇園祭』と京都

　発表者　谷川建司　早稲田大学

2018-10-28　人文研アカデミー2018「映画『祇園祭』と京都」 第 2 日目

公開シンポジウム「京都史の中における『祇園祭』」

中村錦之介の『祇園祭』製作前夜―五社協定と俳優クラブ組合を中心に―

　発表者　木村智哉　明治学院大学

『祇園祭』論争に見る脚本家と監督の権限

　発表者　板倉史明　神戸大学大学院

映画『祇園祭』の復元と保存

　発表者　太田米男　大阪芸術大学

映画『祇園祭』と歴史学研究

発表者　京樂真帆子　滋賀県立大学
近現代史のなかの映画『祇園祭』
発表者　高木博志
2019-11-15
横田良之助へのインタビューと質疑応答
発表者　横田良之助　元・大映（横田商会を設立した横田永之助氏の子息）
司会　上田学　神戸学院大学
2019-02-24
戦後の京都映画史における吉村公三郎の位置づけ
発表者　須川まり　追手門大学
日本映画における時代劇映画の位置づけ
発表者　小川順子　中部大学
Escapade in Japan　日本ロケをめぐって
発表者　石橋佳枝　テンプル大学

8. 共同研究会に関連した公表実績
共同研究会に関連した公表実績〈論考〉1、木村智哉「アニメ史研究原論　その学術的方法論とアプローチの構築に向けて」小山昌宏、須川亜紀子・編『アニメ研究入門【応用編】 アニメを究める 11 のコツ』現代書館、2018 年 11 月 2、長門洋平「川島雄三の音響空間――ジャズ、便所、洲崎パラダイス」川崎公平・北村匡平・志村三代子編『川島雄三は二度生まれる』水声社、2018 年 11 月、242～262 頁 3、長門洋平「破局と近視――宮崎駿『風立ちぬ』について」ミツヨ・ワダ・マルシアーノ編著『〈ポスト 3.11〉メディア言説再考』法政大学出版局、2019 年 2 月、333～356 頁 4、長門洋平「いつもお天気がいいにもほどがある――小津安二郎映画の音楽について」松浦莞二・宮本明子編著『小津安二郎　大全』朝日新聞出版、2019 年 3 月、382～392 頁 5、花田史彦「「平等」の夢と陥穽――中島岳志『下中彌三郎――アジア主義から世界連邦運動へ』（平凡社）を読む」『京都メディア史研究年報』第 4 号、2018 年 4 月、203～214 頁〈口頭発表〉1、長門洋平、川崎弘二、檜垣智也「映画のサウンドトラックにおける「武満徹の電子音楽」」（2018 年 10 月 20 日、MEDIA SHOP） 2、竹内直、白井史人、長門洋平「無声映画からトーキー映画初期～伝統音楽との関わり」平成 30 年度第 5 回伝音セミナー（2018 年 11 月 1 日、京都市立芸術大学　日本伝統音楽研究センター） 3、長門洋平、白井史人「『近松物語』の音響をめぐって」溝口健二生誕 120 年記念国際シンポジウム「『近松物語』における伝統と革新」（2018 年 12 月 22 日、京都府京都文化博物館　フィルムシアター） 4、長門洋平「映画音響から観る木下惠介監督作品」（2019 年 3 月 3 日、木下惠介記念館（浜松市旧浜松銀行協会）） 5、長門洋平「スクリーンを聴く――溝口健二の音響設計をめぐって」シンポジウム「日本映画における〈音〉――小津安二郎と溝口健二を中心に――」（2019 年 3 月 5 日、東北大学片平キャンパス） 6、花田史彦「戦後日本における「独学」の思想――映画評論家・佐藤忠男の教育論」日本社会教育学会第 65 回研究大会（名桜大学）、2018 年 10 月 6 日 7、花田史彦「戦後思想としての大衆文化論――鶴見俊輔と佐藤忠男」日本思想史学会 2018 年度大会（神戸大学）、2018 年 10 月 14 日

9. 研究班員

所内

高木博志、岩城卓二、藤原辰史、小川佐和子、菊地暁、高階絵里加、伊藤弘了

学内

木下千花（人間・環境学研究科）、花田史彦（教育学部）、ミツヨ・ワダ・マルシアーノ（大学院文学研究科文学部）

学外

谷川建司（早稲田大学）、晏妮（日本映画大学）、板倉史朗（神戸大学大学院）、井上雅雄（立教大学）、大澤佳枝（フリーランス映画研究者）、小川順子（中部大学）、北浦寛之（国際日本文化研究センター）、木村智哉（明治学院大学）、久保豊（早稲田大学）、河野真理江（立教大学）、須川まり（追手門大学）、冨田美香（国立近代美術館フィルムセンター）、長門洋平（京都精華大学）、西村大志（広島大学大学院）、上田学（神戸学院大学大学院）、園田恵子（フリーランス映画研究者）

10. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数	参加人数				延べ人数			
		総計	外国人	大学院生	若手研究者	総計	外国人	大学院生	若手研究者
所内	1	3	0	0	0	9	0	0	0
学内	2	3	1	0	0	2 (1)	0	1 (1)	0
国立大学	5	6 (3)	0	1 (1)	3 (1)	17 (7)	0	0	6
公立大学	1	3 (2)	0	0	0	13 (7)	0	0	0
私立大学	10	10 (2)	0	0	0	54 (10)	0	0	7
大学共同利用機関法人	0	0	0	0	0	0	0	0	0
独立行政法人等公的研究機関	1	1 (1)	0	0	0	0	0	0	0
民間機関	0	0	0	0	0	0	0	0	0
外国機関	0	0	0	0	0	3 (1)	3	0	0
その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	19	25 (7)	1	1 (1)	3 (1)	98 (26)	3	1 (1)	13

※（ ）内には、女性数を記載

11. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数
参加研究者がファーストオーサーであるものを対象

総論文数	1(1)
国際学術誌に掲載された論文数	0(0)

※( )内には、拠点外の研究者による成果(内数)を記載

インパクトファクターを用いることが適当ではない分野等の場合

掲載雑誌	掲載論文数	主なもの	
		論文名	発表者名
『ユリイカ 詩と批評』	1	「59 年世代と演出中心主義 高畑勲と東映動画の＜長い 60 年代＞」	木村智哉

※拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す

12. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由
なし

13. 次年度の研究実施計画
なし

14. 次年度の経費
なし

15. 研究成果公表計画および今後の展開等
最終報告書に記載